陳　述　書

2024 年 4 月 11 日

氏名 近藤　佳

第１　はじめに

私は、パートナーである今井美亜里さん（普段、「みあちゃん」と呼んでいるので、この書面でも「みあちゃん」と呼びます）と、家族として暮らしていました。私たちは、法律婚することを希望していましたが、法律上女性どうしなので結婚できず、早く同性婚が実現して欲しいと願っていました。

２０２３年２月、みあちゃんは交通事故に遭い、亡くなりました。加害者の刑事裁判や保険会社との交渉の中で、もし私たちが法律上の配偶者であれば認められたであろう権利が認められませんでした。

みあちゃんが希望していた法律婚をこれからの社会で実現するため、私にできることを続けていきたいという思っています。今回、その思いから、私の経験したことをお話する形でこの訴訟に協力することにしました。みあちゃんが亡くなる前にも、他の同性カップルたちと同様に法律婚ができないことで悔しい思いをする出来事はありましたので、生前の出来事も含めて時系列でお話します。

第２　みあちゃんとの生活

１　みあちゃんとの出会い・同居開始

みあちゃんとは、２０１７年、私が飲みに行ったクラブで出会いました。彼女はその店でボーイとして働いていました。出会ってすぐにみあちゃんに惹かれ、私からアプローチしました。当初、私は自分自身が女性も好き

になるセクシュアリティだと自覚しておらず、Xジェンダーでかっこいい外見をしているみあちゃんのことを男の子だと思ってアプローチしていました。

他のスタッフさんが私に、「あの子は、かっこいいけど女の子なんだよ」と教えてくれました。自分の好きになった相手が女性だと言われても、あまり驚きはありませんでした。当時は、「自分が男性以外は好きになったことない」と漠然と思い込んでいましたが、みあちゃんを好きになったことをきっかけに自分の子ども時代を振り返ってみると、女性を好きになったことは昔からあったなと思い出してきました。自分にとって、みあちゃんを好きになることはとても自然なことでした。

アプローチが実り、みあちゃんと交際を始めました。ちょうど付き合って半年ほどのタイミングで彼女が暮らしていた賃貸物件が満期になったので、その部屋は更新せずに退去し、みあちゃんが私の住んでいる家に引っ越してくる形で一緒に暮らし始めました。私はもともと私のミニチュアダックスフンドのさんごちゃんと暮らしていたので、２人と１匹で一緒に暮らし始めました。

２　家族へのカミングアウト

私は実家の家族と仲が良く、食事に一緒に行くなど、頻繁に会っています。

みあちゃんと交際を初めた当初は、私のセクシュアリティを家族に打ち明けていなかったので、みあちゃんを友人として紹介しました。私の父は、最初は「あまりに男の子っぽい子を連れてくるなあ」という印象だったようです。みあちゃんと一緒に食事に行く機会が増えると、父はみあちゃんの人懐っこいところを好きになったようでした。ファッション好きという共通点があったり、食べ物の好みでも好きなものや嫌いなものが同じで、「あれは美味しい」「これは苦手」と意気投合して盛り上がっていました。

父と３人で会っているときに、みあちゃんが友達ではなく恋人だと打ち明けました。私にとっては、家族への初めてのカミングアウトでもありま

した。父はとても喜んでくれて、Xジェンダーであるみあちゃんが父にとって娘なのか息子なのかはよく分からないけど、一人の大事な家族としてますます仲良く交流していました。私がいなくても、私の父とみあちゃんの２人でご飯や買いものにも出かけていました。今考えてみると、父はみあちゃんと一緒に過ごす時間の方が、私と過ごす時間よりも長かったかもしれません。みあちゃんも、私の父を「パパ」と呼んで、慕ってくれていました。

後から聞いたところ、父の親しい友人の中にゲイの方がいて、カミングアウト前から「もしかしたら二人は恋人なのかも」と思っていたそうです。父の同世代の人の中には、性的マイノリティに偏見や誤解を持っている人も少なくないので、父が自然に受け止めてくれたことがとても嬉しかったです。

３　みあちゃんが救急車で搬送された際の出来事

２０１８年頃、みあちゃんが病気により救急搬送されたことがありました。私の外出中にみあちゃんから激しい痛みあるという連絡があり、心配ですぐに自宅に駆け付けました。その間に本人が自分で救急車を呼んでいて、ちょうど私が自宅に戻った時に救急車に搬送されているところでした。

私も救急車に一緒に乗ったのですが、その際に、救急隊員に私たちの関係性を尋ねられました。私が「パートナーです」と答えたにもかかわらず、救急隊員が記入していた書類の同乗者欄には「友人」と記載されてしまいました。「友人」と書き込まれたのを見て、引き離されるのではないかと不安な気持ちになりました。「自分が強行突破していかないと、もしみあちゃんが死んだときに死に目に会えない」と考え、搬送される間、ずっとみあちゃんに密着してついていきました。

病院に搬送された後、みあちゃんは検査を受ける際に怖くてがたがた震えていました。みあちゃんが安心できるよう、私はずっと手を握ってあげていました。

医師の問診では、みあちゃんはセクシュアリティも含め医師に伝えたの

ですが、医師からの質問には「みあちゃんの話を理解していないのかな？」と疑問に思うようなものもありました。

ただでさえ、みあちゃんは自分の健康状態のことで痛みや不安を抱え、私も大事なパートナーの身が心配でたまらない状況なのに、私たち２人の関係性やセクシュアリティについてはっきり伝えても救急隊員や医師に理解してもらえないという出来事も重なったのは、とても悔しかったですし、ますます不安になりました。

４　「ＯＵＴ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ」プロジェクトへの参加

２０１９年４月、私たちは、東京レインボープライドに一緒に参加しました。東京レインボープライドは、性的マイノリティの尊厳を求めるイベントで、毎年春頃に開催されています。

さまざまな団体や企業、自治体等がブースを出展している中に、「ＯＵＴ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ」のブースがありました。「ＯＵＴ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ」は、性的マイノリティの存在を可視化するプロジェクトです。世界的な写真家であるレスリー・キー氏に写真を撮ってもらい、自分のセクシュアリティやメッセージとともにプロジェクトのウェブサイトや写真展で掲載してもらうというものです。レスリー・キー氏本人が来日し撮影会をしていて、当日参加も可能とのことでした。

みあちゃんは、もっとオープンに顔や名前を公表して性的マイノリティの人権のための活動に関わりたいという思いがありましたし、以前から他の方々の写真を見て「ＯＵＴ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ」で写真を撮ってもらうことにも憧れていました。私自身はもともとそうした活動に意欲があるわけではなかったのですが、みあちゃんの頑張りたい気持ちに応えて一緒にやってみたいという気持ちになり、２人でプロジェクトに参加を決めました。

その時撮影してもらった写真は、今も「ＯＵＴ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ」のウェブサイトに掲載されています（資料①）。

５　文京区のパートナーシップ制度への登録

２０２０年４月１日、当時私たちが暮らしていた文京区でパートナーシップ宣誓制度が開始しました。同月１３日、私たちは、利用第一号カップルとしてパートナーシップ制度に登録をしました。宣誓書受領書を受け取る姿と、「パートナーシップ宣誓すら躊躇するＬＧＢＴＱの方が大勢いるが、ぜひ当たり前の世の中になってほしい」という二人のコメントを文京区のFacebookに掲載してもらいました（資料②）。

第一号宣誓者になったのは、知り合いを通じて、文京区の区議会議員さんに声をかけてもらったからです。まだまだ、顔や名前を出してセクシュアリティをオープンにできる性的マイノリティが多くないということを踏まえて、顔や名前を出せるカップルが第一号宣誓者になれば大きく報道してもらうことができるし、性的マイノリティの人権のために活動したいという２人のやりたいことにも合うのではないか、と勧めてもらいました。

文京区のパートナーシップ制度に登録できて、みあちゃんは「（社会に）認められた気持ちになった！」とすごく喜んでいました。私は少しドライなタイプなので、「パートナーシップ制度に登録できたところで、法律婚できないなら実生活的な面では何もできないじゃん」とあまり素直に喜べない気持ちでした。そんな冷めた私の感想に対して、私の父が「そういうことが積み重なって意味のあることになるんだよ。どんどん参加してきなさい」という言葉をかけてくれました。その言葉が嬉しく、その後もみあちゃんと自分たちにできる活動を続けました。

６　ＡＢＥＭＡヒルズへの出演

私とみあちゃんは、二人でＡＢＥＭＡヒルズというＡＢＥＭＡのニュース番組に出演したことがあります。

２０２０年９月１５日放送の「「結婚が大きな夢っておかしい。家族になれずに死ぬのはつらすぎる」 国勢調査で集計されない“同性カップル”強く願う“家族”のかたち」というニュース（資料③）と、２０２１年６月３日放送の「「民法が変わらないと何もできない」都が同性パートナーシップ制度導入を検討も…当事者の思い」というニュース（資料④）です。

出演のきっかけは、「ニュース番組に顔出しできる同性カップルを探している」と知人から紹介されたことでした。

出演にあたり、「テレビに出る」ということで、二人ともわくわくしていました。性的マイノリティに対し差別的な人からは叩かれるかもしれないという予想もしましたが、「どういう風に叩かれるのかな」など、反応を楽しみにする気持ちもありました。平等という当たり前のことを求めて、信頼するパートナーと二人で取り組んでいることなので、ネガティブな反応があってもたたかっていこうという自信をもっていたからです。

２０２０年９月の番組は、全国で実施される国勢調査で同性カップルが集計されないという問題を取り上げたものでした。ちょうどこの年、コロナ禍で世帯ごとに定額給付金が支給された際に、別々に支給を受けたことがきっかけで、「家族として扱われない」という事実に直面しました。パートナーシップ制度は、もちろん無いよりもあった方がいいのですが、自治体の制度だけではできないことばかりで、いかに実生活に意味がないかということを痛感させられました。私たちをきちんと婚姻関係、配偶者として認めて欲しいという思いを取材でお話しました。

放送された番組は、二人で一緒に見ました。私たちがキスするシーンも流れたので、その部分は使われると思ってなかった私たちは驚きました。「キスするんじゃないよ、とか言われそうだよね」と二人で笑いながら話していたのを覚えています。

放送後、知り合いから番組を見たと声をかけてもらいました。「すごいラブラブだね～」というような反応の人もいれば、「（同性カップルの置かれている状況を）知らなかった、怖いね」といった反応をしてくれた方もいました。

２０２１年６月の番組では、東京都がパートナーシップ制度導入を検討したというニュースへコメントを寄せました。制度ができることは嬉しいけれど、実生活のためには結婚を認めて欲しいんだという思いを伝えました。番組の内容を掲載しているウェブページ（資料④）には、みあちゃんの「私は同性婚（が認められてほしい）というのがかなり大きいです。性

的マイノリティとして生きてきて結婚にあこがれもありましたが、叶うことはないんだろうなと思っていました」というコメントが今も掲載されています。

7　二人の生活設計

みあちゃんに体調の関係で働けない時期もあったため、私がこの家族の稼ぎ頭になろうと決めて、２０２２年に転職しました。それまでは事務職でしたが、不動産関係の営業職に転職しました。自分ひとりでの暮らしであれば、事務職のままでもよかったのですが、みあちゃんとサンゴとの暮らしに安定した見通しを持つために、心機一転新しい分野に飛び込みました。新しく覚えなければいけないこともたくさんあり大変でしたが、みあちゃんとサンゴとの生活のためという思いのおかげで頑張れました。

仕事を終えて帰宅した後に、みあちゃんと食事をしながらその日あったことをお互いに話したりする何気ない時間に支えられていました。そういう私たちの生活は、法律上男女で法律婚している夫婦と何も変わらないものでした。

私たちは、二人とも、早く法律婚ができるようになって欲しいと思っていましたし、実現すればすぐに結婚するつもりでした。特に、みあちゃんは乙女なところがあって、「花嫁姿のけい（私）を見たい」とか、「結婚式をしたい」と、日頃から話していました。私はもともとそういうロマンティックな憧れは持っていないタイプでしたが、楽しそうに話をするみあちゃんの姿を見て、私も結婚式をしたいと考えるようになりました。そうした二人の思いを汲んで、私の家族がサプライズで結婚式のようなイベントをしてくれたこともありました。家族がケーキを準備してくれて、二人でケーキを切りました。

法律婚ができない現状で、「お互いに遺言書を残そうね」「公正証書作らなきゃね」という話も、ことあるごとにしていました。将来の生活のことや一方が死別したときのことも想像して、資産運用について話をすることもありました。ただ、みあちゃんが生きているうちは日々が幸せで、幸

せなことにばかり目が向いてしまい、万が一のことを話はしていても、あまりリアリティをもつことはなく、具体的な手続きに移す機会をもたずにいました。

また、二人で「死んだ後は同じ海に散骨しよう、（愛犬の）サンゴも同じ海に散骨したらいいね」と何度か話をしていました。以前、私の母が亡くなった際に海に散骨しており、とてもきれいな海で母を弔うことができたのは良い思い出になっています。その海にいけば母に会えるような気持ちになります。私がその経験をみあちゃんに話しており、「同じ海で散骨すれば、亡くなった後もきれいな海でずっと一緒にいられるね」と、みあちゃんも私も散骨を希望していたのです。

第３　死亡事故とその後の経過

１　死亡事故当日の状況

２０２３年２月７日、みあちゃんは職場に出勤中に交通事故に遭い、亡くなりました。

職場の目の前の横断歩道を渡っていたときに、交差点を左折してきたクレーン車に轢かれるという事故だったようです。クレーン車は時速４キロくらいしか出していなかったとのことですが、左折に巻き込みに気をとられていて前方を十分見ていなかったようです。クレーン車のドライブレコーダーに事故の様子が記録されていましたが、私は法律上の配偶者ではなく、遺族でない扱いを受けたため、直接その記録を確認する機会がありませんでした。ですので、この事故状況は事情聴取や刑事裁判を通じて把握したことです。

当時、みあちゃんは派遣で働いていました。派遣元の会社から、緊急連絡先になっていた私宛に電話があり、「今井さんがまだ出勤していない」、「今井さんらしき人が事故がまきこまれ意識不明で搬送されたのを他の従業員が見たらしい」と告げられました。

みあちゃんのことが心配でたまらなくなり、早く状況を確認しなければと焦りました。その電話を受けたとき、私は上野駅にいたので、すぐに上

野警察に駆け込みました。「自分のパートナーが職場の近くで交通事故に遭ったと聞いたので、事故の詳細を教えてほしい。〇〇（みあちゃんの職場の所在地）で事故にあって搬送された人のパートナーなんです」と伝えました。すると、警察からは、「親族じゃないので教えられません」と返事をされ、事故の状況を教えてもらうことができませんでした。

今思えば、その時に、「姉妹です」と関係性をごまかして尋ねれば、事故の状況について教えてもらえたのかもしれません。ですが、その時、パートナーであることを偽らずに言いたい自分がいました。それに、気が動転している状況でとっさに取り繕うような嘘をつくのは現実的には難しかっただろうとも思います。結局、馬鹿正直に関係を説明しても状況を教えてもらえなかったので、「正直者が馬鹿をみるってこういうことなんだ」という気持ちになってしまいました。

みあちゃんの弟（以下、単に「弟」といいます）と面識があったので、最終的には、弟に連絡をとり、弟を経由して搬送先を確認しました。

私と弟は、みあちゃんが病院で治療を受けていると思っていましたが、搬送先として案内されたのは警察署でした。親族である弟と同行したので、私も一緒に案内を受けることができました。私は、当初、警察署に案内されたことの意味がわからず、「事故のことを説明されるのかな」と思っていました。弟もそうだったと思います。

私たちが通された場所は安置所でした。警察官から「お顔を確認いいですか」「残念な事故で」と声をかけられ、ようやくなぜ安置所にいるのかわかりました。まさか彼女が死んだとは思ってもいなかったので、みあちゃんが死んだのだと頭で分かっても、現実味がなく、人生で初めて夢と現実の区別がつかない感覚になりました。

みあちゃんの顔はきれいで、触れるとまだ温もりがありました。寝ている時の顔とは違うのが分かるのですが、理解が追い付きませんでした。涙が出てくるわけでもなく、なにか現実的ではないという感じでした。弟が隣で泣き出したので、ふと我に返りましたが、それでもまた状況が把握しきれず、まだ死んでいるという実感はわきませんでした。「朝、いつもど

おり家を出ていったのに、もう帰ってこないなんて」と思ったのを覚えています。

2　警察からの聴取

事故の後、警察での聴取を受けましたが、その際に、警察官は「同性愛者の方ってどういう生活しているんですか？」など、何度も何度も「同性愛者は…」という聞き方を繰り返しました。

質問の内容は、単に、時系列で私とみあちゃんがどういう生活をしてきたのかなど生活状況を尋ねるもので、私は食事の準備の分担など二人の生活について説明をしました。ですが、家事を分担しながらともに暮らす私たちの生活は、同性愛者かどうかなんて関係のない普通の暮らしです。警察官の質問の仕方は、まるで同性カップルが普通の人ではないかような偏見が透けて見えるようでした。率直に「これに男か女か関係ありますか？」と聞き返してしまいました。

大事なパートナーを亡くした状況で、さらに偏見にさらされるという状況は、とても腹立たしく、悲しかったです。

3　事故加害者の刑事裁判手続き

私と弟は、共同で弁護士に依頼して、事故加害者の刑事裁判への被害者参加を申請しました。みあちゃんの遺族として、みあちゃんを失った心情を法廷で自ら伝えたいと思ったからです。裁判所に対し、弁護士を通じて、私とみあちゃんがパートナーシップ制度に登録して、長い期間一緒に住んで法律上の夫婦となんら変わらない生活をしていたことなどを伝えていましたが、私の参加は認められませんでした。裁判所が被害者遺族として裁判への参加を認めたのは弟だけでした。

私の心情を綴った陳述書を、私自身が読み上げるのが認められなくても、私の代理人である弁護士に読み上げてもらうこともできないかかけあってもらいましたが、それさえも叶いませんでした。裁判所は「（法律上同性のパートナーが遺族として参加する）事例をつくりたくない」そうだと、

弁護士から説明を受けました。

最終的に、私が心情を綴った陳述書を証拠として、法廷で検察官に読み上げてもらうことになりました。それすら、裁判所から当初は「途中で止めるかもしれない」と言われました。結局は、検察官に最後まで読み上げてもらえましたが、後から検察官や弁護士からも「異例の対応である」と説明されました。

被害者参加が認められた弟は、法廷の中で検察官側の席に座り参加していましたが、私はあくまで他人として傍聴席から裁判を見守ることしかできませんでした。

裁判手続きそのものは、淡々と進んでいった印象でした。被告人質問の中で、加害者は、みあちゃんに対しては「すみません」という言葉を繰り返していましたが、パートナーである私への謝罪の言葉はありませんでした。傍聴席にいる私に対して、加害者からも加害者の弁護人からも、お辞儀の一つもありませんでした。

判決の中では、パートナーである私の心情についても言及されており、私の気持ちを労わる部分もありました。けれども、結論としては執行猶予がついていて、驚きました。正直、執行猶予がつくだろうという見通しは聞いていたのですが、刑事裁判の中で、この加害者が以前も飲酒運転で摘発されたことがあるという話もでていたので、みあちゃんを亡くした私からすれば、今回の事故がたまたま起こったことだからといって刑務所に入らなくて済むというのは信じがたいことでした。判決言渡しを聞きながら「本当に執行猶予なんだ」「この人は明日から普通の生活に戻れるんだ、こんなあっさりした裁判で反省できるのか？」とショックを感じました。ちょうど小学生が何人かで傍聴に来ていて、「人を殺したのに刑務所に入らないのはおかしいね」と言っていたのがよく記憶に残っています。「小学生にでも疑問に思うことなのに、なんで」とやるせない気持ちになりました

判決までの間の様々な場面で、私とみあちゃんのふうふ関係が否定されたことや、私がいないことにされ続けたこと、判決への悔しい思いが重な

り、「こんなにもいろんなことが報われないのか」「こんなに報われないのはみあちゃんがかわいそうだ」と、気持ちの整理がつきませんでした。

4　死後の様々な手続き

みあちゃんの死後まもなくは、みあちゃんの親族との関係も悪くなく、お葬式は私と弟の２人が喪主という形で執り行うことができました。ですが、次第に、意見が食い違い、親族と良好な関係を維持していくことができなくなりました。

例えば、遺骨をめぐる意見の違いがありました。上述のとおり、みあちゃんと私は、同じ海に散骨されることを二人で希望していました。この以降を親族の方に伝えたところ、親族の方は、海への散骨は馴染みがなかったようで、地元のお墓に納めたいとのことでした。私は、みあちゃんと法的に認められた関係性ではなかったことから、どういう立場で物を言っていいのか分からないという思いもあり、最終的に親族の意向に沿うことになりました。

また、加害者の保険会社から受け取った賠償金の分ける場面でも、困難はありました。私が法律上配偶者であれば、権利の割合を法律に従って決めることでスムーズに話が進められたのだろうと思いますが、私が法律上は他人であるため、折り合いをつけていくのはスムーズではありませんでした。

私はみあちゃんと暮らし、一番そばにいて、たくさん話をして、みあちゃんが何を大事に思って生きてきたのか、自分の死後についてどんな願いがあったのかを一番知っています。私がもし法律上配偶者という立場での発言権があれば、私を通じてみあちゃんの思いを実現することができたのだろうと思うと、それができなかったことが悔しく、悲しいです。

第４　法律婚ができなかったことへの思い

1　一番心にあること

やはり、私にとって一番強く思うのは、「彼女の一番の夢をかなえてあ

げられなかった」という悲しさで、それに尽きます。

確かに、法律的にふうふになっていたら、彼女が亡くなってからの諸々の手続きのことで、私ももう少し楽にできたかもしれません。でも、そのこと以上に、みあちゃんの一番の夢を叶えられなかったことが悔しくてたまりません。

みあちゃんは、どこか冷めている私と違って、私と結婚することが夢で、その夢を実現するためにいろいろな活動に携わっていきたいという思いを強く持っていました。ただ「結婚したい」って、小さい子どもの夢みたいですけど、なんでこんなに叶えるのが難しいんでしょうか。

上述のとおり、みあちゃんは、私の花嫁姿を見たいとか、結婚式したいとか、結婚をして祝福されることを楽しみにしていました。私はその夢を叶えるためにはなんでも協力するつもりでいました。今でもそう思っています。

2　裁判官に伝えたいこと

私たちは、同性どうしの結婚を求める当事者だから、そうした話題のニュースに目を向けます。ですが、世間はどうなのかなと疑問に思うときはあります。私の知り合いは、私を知っているから、興味を持ってニュースを観てくれていますけど、正直、興味がないという人も少なくないと思っています。でも、「同性カップルが結婚できるかどうかなんてどっちでもいい」と思っている人が多いのは、いいことでもあると私は思っています。「どっちでもいい」というのは、「同性カップルが結婚できるようになっても問題ない」と思っているってことだからです。「もう日本でも同性カップルが結婚できるようになっている」と勘違いしている人もいれば、「なんで結婚できないのかな」程度に思っている人もいます。

いい意味で多くの人が「同性カップルが結婚してもしなくてもどっちでもいい」と思っているのに、一部の政治家だけが反対して、まるで日本社会が変わってしまうおおごとのことかのように話をしています。多くの人は、同性婚ができるようになっても問題ないと思っているのに、どうして

実現のためにこんなにたたかわなきゃいけないのだろうって、悲しくなってきます。本当に不思議です。

当事者以外への影響という意味では、むしろ、私とみあちゃんが結婚できなかったことで、「けいちゃん（私）が悲しそう」「みあちゃんがかわいそう」と、私以外の人にも悲しみが生まれています。私たちが結婚できたところでそれを問題だと気にする人はいないけれど、結婚できなかったことで一緒に悲しんでいる人はいる、この現実をこの訴訟の裁判官にもわかってもらいたいです。

以上